

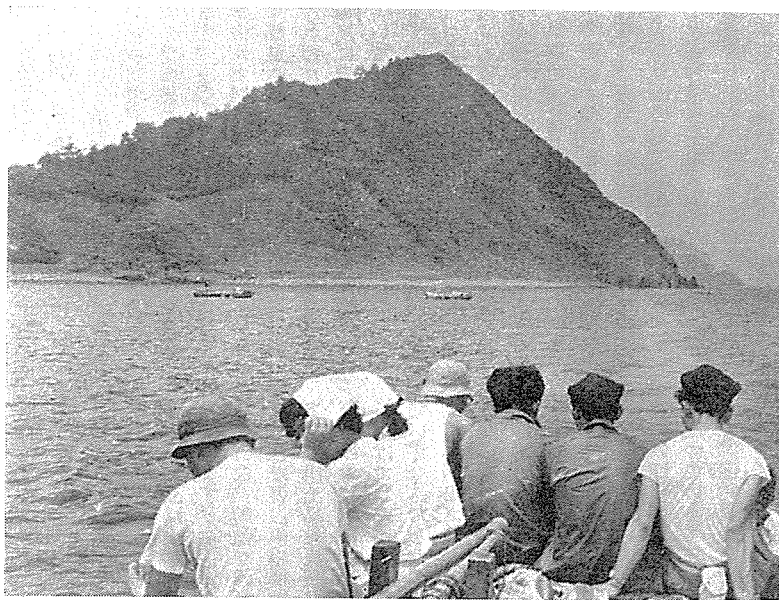
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Aug. 30th, 1955. No. 282.

關西大學學報

昭和30年8月 第282号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年八月三十日發行（毎月一回三十日發行）
通卷第二八二号



玄海灘を越えて海女の実態を探る
—関西大学法律学会—

關西大學學報局

トロイとエフソス

廣瀬捨三

(トルコ通信)

七月三十日午前十時半キプロス島ニコシヤ空港発。東海岸の山脈にお伽噺にあるような城を目下に見乍ら、次第にキプロス島を離れますと、はや小アジアのトルコが見えてきました。近東一帯樹木の密生した山とはなく、岩肌了点々と樹木が見えるのはトルコも、亦ギリシヤも同様です。十二時四十分アンカラ着、暫く降りて休憩の後、機は西へ向い、マルマラ海の絵のような王女が島 (Isles of Princesses) を下に見乍ら、午後三時イスタンブール空港に着きました。

空港からバスで市内へ向いますと、先づ延々たる城壁が見えます。市内へ入るとすぐ市電があり、街は古い建物が多く案内汚ない狭い通りです。木造建もあつて、日本の文化住宅を古くしたようなものです。

モスクが通りに到る処にあつて、その境内の墓地の石柱は、一寸寺町を走っているようです。やがて彼方の丘陵に市街やモスクの大ドームや尖塔がこまかくしと見え、大通りへ出てローマ時代の大道橋跡を通り抜け、アタテュルク橋を渡つて、近代的建築の多いベラ区に入りました。既に街の大半を見物したようなものです。

トルコは今までの諸国と大分勝手が違いました。空港で両替したところ、一ドルが約二リラ八〇クルシユ

(一リラは百クルシユ)で、ホテルへ着きますと朝食のみ付で一泊二五リラで、これでは約九ドルにつきなかなかクルシユおます。ホテルの料理はまづいいという

が、私は今までホテルで三食付で、兎も角おいしい西洋料理が給仕付で鰯腹食べられたのに、これからは食事の心配をしなければならぬので、甚だ困りました。日本大使館も夏にはアンカラからイスタンブールへ来ているとは聞いていましたが、住所が判らない。

トルコ料理はアラブ諸国も同様ですが、西洋料理の出来損いみたようなもので、私の口に合わない。それにこうホテル代が高くては一日十ドルはかかるので、早々に見物してギリシヤへ行かうと、イスタンブールを八月一日二日の二日間で大体見て廻りました。

八月二日ホテルで両替を頼むと、一ドルを五リラの割合で替えてくれます。公定の約二倍でこれで一安心しました。かねてトルコは公定で抑えているから、ヤミで替えて行きなさいと、ペイルートで聞いたので、ここでも試みに替えましたら、やはり一ドルが五リラの割でした。ペイルートは両替が自由自在なので、却つて替えるたびに始終損をしているような気がしたのですが、これではもつと替えておけばよかったと思ひました。八月二日又観光案内所で日本大使館の所在を教えて貰ひ、三日出掛けて、大使や塩尻、菅沼さんら

に会つてきました。

イスタンブールはゴールデン・ホーン (金角) 湾が中央に入り込み、ベラ地区とイスタンブール地区に別れ、ボスフォラス海峡をへだてて、アジアの方にも街があります。名所旧蹟は大抵イスタンブール地区にあり、各国大使館、ホテル、繁華街はベラ地区にあります。

八月一日ベラ地区の古代東洋美術館 (Museum of Ancient Oriental Arts) へ行く。パピロン、アッシリヤの出土品はイラク博物館 (バグダード) よりも豊富にあります。楔形文字の石板、粘土板、浮彫の大彫刻、石像、動物を浮彫りにした彩色煉瓦、其他小さな人形像など占領中に皆持つて来たのでありませう。小アジア出土品も流石に沢山ありましたが、エジプト室だけはお粗末なもので、虫の食つたミイラ棺が少しあるだけでしたが、ミイラはエジプト博物館でも公開していませんでしたが、ここで一つ見ました。正午閉館で、外へ出て昼食をしてから近所のセント・ソフィヤ寺院の傍で一服した後、今日は日曜で旧宮殿の宝物拝観が出来るといので見に行きました。サルタンの衣裳調度皆凝つたものです。王宮よりボスフォラス海峡を臨み、暫し暑さを忘れました。対岸に兵舎とナイチンゲール病院の大建築を眺め、レアンダーの塔と称する白い灯台も見え、海峡には汽船が行かい、汽車が下を走っています。少年の頃「中学生」という雑誌があつて、毎月表紙に世界各国巡りの絵があり、七月号に少年がボスフォラス海峡に舟を浮べて胡弓を弾ひ、背景に月が出てイスタンブールのモスクが見えています。又これも二十年も以前でせうか、ドイツ映画にイスタンブールを背景にして、丁度芥川龍之介の「開化の殺人」のようなストーリーのありました。

も夏の夜ボスフォラス海峡に舟を浮べるシーンがありました。そんなことを思い出して遠くもここに来たなあという感慨一沙でした。残念乍ら遂に舟に乗る機会はありませんでしたが、イスタンブールの夜は更けて西空に月と金星を仰ぎ乍らガラタ橋で暫く佇んだものでした。ドイツで思い出しましたが、こは一時かなりドイツが勢力を張つたらしく、ドイツ語専門の本屋もありますし、王宮で涼んでいるとトルコ人がドイツ語で話しかけて来ました。勿論一番よく通じるのはフランス語で、殊に田舎へ行くとき英語ではさつぱり通じません。若い人は殆んど皆英語を勉強していて次第に英語になるでせう。

王宮の宝物拝観をしてから古代博物館 (Museum of Antiquities) へ行きました。ここに有名なシドン (Sidon) で発掘したアレキサンダーの石棺と称するものがあります。前面ギリシヤ人とベルシヤ人との戦い、背面には狩の場面の浮彫あり、彩色もまだ残つています。トルコ国内出土のものや、ギリシヤから持ってきたギリシヤの神々の像も沢山あります。例により石棺、墓石も多いのは一寸うんざりします。前に述べたようにキプロス島アマスス (Amathus) 出土の巨大なエジプトのベス (Bes) 神像と称するものもありました。他の国々のよいものは皆取つて来ている代りに、トルコのよいものはモスコ博物館にあるそうです。

博物館を出ると日曜のこととて公園は賑かで、飲食店が並び、飛行機乗りや玉投げ、空気銃で賞品を打落すのや、人魚や二頭牛の見世物、猛獣のサーカスと、まるで日本の田舎の祭日です。カイロでナイル河の島の島で毎夜こんなのがありました。

八月二日セント・ソフィヤ寺院へ行きました。ここ

はもう博物館になつていて、土足のまま自由に見られます。宗教の残骸です。私には丁度ふさわしいでせう。キリスト教会を回教寺院に改修したもので、ローマ時代の円柱、聖母マリヤのキリストを抱いた絵が南の円天井に残っています。内部は大理石のこととて、ひいやりして涼しく静かな憩いの場所でした。其日は其他オペリス公園、地下水の溜つた地下の宮殿、コンスタンチンの円柱、回教寺院の二、三と、大水道橋、カバード・パザールと称する商店の密集した所などを見ました。イスタンブール大学もなかなか立派な門があつて、広い庭園に行くこと暫しで本館があります。旧王宮だから立派なのでせう。庭園のベンチには皆昼寝をしに來ています。大学も色々な役に立ちます。大学の外郭の東南部は金物屋が密集していて、カンカン、ガンガンと銅や釜を叩いていて大学まで聞えてきます。

私はキプロス島ニコシヤのホテルの読書室に「イズミールからエフェソスへ」(From Izmir to Ephesus) というパンフレットを見つけて、いたく心を動かされました。イズミールとは古代のスミルナです。エフェソスは世界七不思議の一つ、アルテミス神殿のあつた所、ここから出土した乳房の沢山あるアルテミス神像は有名です。又ここは Seven Sleepers of Ephesus の伝説があります。しかしトルコへ行つても果して行けるかどうかと思つていましたところ、八月一日イスタンブールの書店で同じパンフレットを見つけて求め、又八月三日日本大使館で、イスタンブールのテクニカル・ユニバーシティで地震学を講じておられる東大の萩原博士に丁度会い、あなたがその方面が御専門なら是非行つて来なさいとすゝめられ、小生到頭トロイとエフェソスだけは是非見に行かうと決心したのであ

る。

翌八月四日ヴァゴン・リ (Wagon-Lits) 旅行会社で辛うじて英語の判る者を見つけて色々かけあつた結果、兎も角明日五日チャナッカレ (Gazikale) への飛行機があるから、チャナッカレまで飛び、附近のトロイを先に見ることになつた。イズミールへの飛行機は九日まで全部満員とのこと。後は行先々で計画を立てることにして、翌五日トルコ国立航空会社の飛行機で小生又アジアに逆戻りすることになった。乗ること三十分程でマルマラ海に面するパンドイルマ (Pandarina) に到着。客は大半降りてしまい、小生ら五人だけが又四十分ほど乗つてチャナッカレ着。空港といつてもたゞ一本の滑走路が町の東にあるだけで、四本柱に木の葉を上被せた小屋で数人待つてゐる。カイロで話に聞いていたエチオピアの飛行場へ降りたのかと思つた程でした。それでもバスが来て町へ運んでくれました。同乗の客が親切に宿を教えてくれて行く。一泊二リラ五〇クルジュ (約二百円) とのこと。三食つかない。イスタンブールの十分の一である。三階の狭い部屋で洗面所便所は共同で、勿論水しか出ないし、バスはない。それでも窓から臨めば前はチャナッカレ港 (といつても棧橋があるだけだが) で、ダーダネルス海峡 (チャナッカレ海峡) をへだてて彼方にはヨーロッパ側のトルコが手に取る如く見える。眺めだけは申し分ないところ、良辰美景だが賞心樂事、共に存すること難した。宿の者は英語なんか知らない、他の客もフランス語ならというのだが、幸い英語の話せる学生がいて、親切にトロイへ行くのに警察に届けて、私服の警官が来てくれて自動車の交渉をしてくれ、三〇リラ (約二軒四百円) でトロイへ往復することになり、早速その警官と学生と私とで車を走らせること約一時

間。沿道は松林の丘陵地である。トロイ城址に着くと軍服に赤い帯のある軍帽を被った男が出てきたものだから、ヘクターの亡霊にはあらで、日本の旧軍人が出て来たのかと吃驚したが、これでトロイの番人である。よく見れば人なつこい顔をしている。城壁、処刑場、劇場、通り、宮殿址と見て廻る。海は遙かに遠のいて、全体として小規模なようで昔を偲ぶすがもないが、落陽を仰いでトロイの廃墟で出された水瓜を食べた。出土品は附近の家に並べてある。思はぬに早く見られたことを感謝して帰る。宿の裏の岸壁にテーブルを出し、色電球や螢光灯をつけて海峡を眺め乍らの夕食である。パンにピラヴ (Pilav) と称する米飯にテキ、サラダを食べて二百円とはからなかつた。ラジオが現代流行歌手の歌う浪花節のようなのを聞かしてくる。部屋で休んでいると宿の若者が呼ぶので出ると、階段の窓から隣りの屋上の野外映画館がまる見えで、こちらは椅子を持出して一緒に見物したがイタリ―映画で、ロハではやはり身が入らず部屋へ帰る。

翌八月六日又昨日の学生が町を案内してくれ、トルコ風呂にもこんな田舎で初めて入つてきた。一人づつ寝台もある脱衣室があり、タオル三枚貸してくれて、それをまとつて浴室へ行く。湯と水が石盤に入るようになっていて、金だらいてそれを汲出しては洗うのである。円形の浴室の周りに数ヶ所それがあつて小部屋になつていて一人づつ一つの石盤のところへ行く。他人と混在 (混浴とはいかぬ) しないところは西洋式だが、外で洗うだけで、つかるわけにはいかぬ。この両者を兼ねた日本の風呂がやはり一番よいなあと初めての日本礼賛である。それに又安上りだ。トルコ風呂でも、出て頭を拭いてくれたり、紅茶を持つてくるが、二リラ五〇クルシユ (約二百円) 取られた。

八月六日夕方このチャナッカレの棧橋に百五十人程の観光客を乗せた船が横付けになり、大型バス教台に分乗、直ちにトロイ見物をして来て、夜の九時過ぎ船はイスタンブールへ向けて出帆した。

かうして団体で来ればこんなに要領よく楽に出来るのに、小生などは明後八日漸くイズミール行のバスを予約して、先方は着けば又ホテルの心配からエフェソス行の計画を立てねばならぬ。苦労は苦労だが又気儘に行ける気楽さもある。汽笛一声汽船は棧橋を離れ、船中では音楽を奏し、英、仏語でアナウンスしている。小生イスタンブールでもここでも汽笛の物悲しい音を聞いても、一向何んとも思わない。却つて飛行機の爆音が郷愁を呼ぶのである。

翌々日の八月八日チャナッカレを立つ。このホテル代三日間で僅か七リラ五〇クルシユ (約六百元)。朝の五時半日の出と共にバスは出発、指定席だが座席は狭く、網棚に物を載せても始終揺れ落される。

窓ガラスなんかないので埃まみれで午前十一時過ぎまで走つて、バリケシル (Balkesir) に着く。ここで三時間休憩で昼食である。田舎では皆バスの集まる広場があつて、数十台のボロ・バスがずらりと並んでいるのはなかなか壯観で、昔の宿場を思わせる。ここで初めて便所に行く。西洋人の辛抱強いのは感心した。トルコでは手洗いの水も壕詰で売つていると「厠考」という本で読んだが、そんなことはないが、便所の入口に臭いの一人腰かけていて、皆小銭をやつてゐる。乞食の一種なんだらう。ギリシャの田舎のレストランの便所でも経験した。壕詰といへば、イスタンブールでも何処でも、トルコでは水を壕詰で売つていて、皆それをがぶがぶ飲んでいる。一杯二・五クルシユ (約二円) である。勿論ロカンタシ (レストラン)

では料理についてたゞで飲める。コカコラ文化はまだドルコに及んでおらない。コカコラもあることはあるが一本五五クルシユ (約四十四円)。小壇のサイダーが一〇クルシユから一五クルシユ (八円から十二円) で飲める。

午後二時過ぎバリケシル発。今度は二ヶ所で休んで、日もつくに暮れた午後八時過ぎやつとイズミール着。このアンカラ・パレス・ホテルに落着く。パースはないが、部屋で湯、水が出るのでほつとした。一泊三食なしで五リラ二五クルシユ (約四百二十円)。翌八月九日階下の食堂へ行くと、二人の日本人がおられる。大阪東区南久太郎町の又一株式会社社の山本、池田両氏でトルコ人の案内で昨日はエフェソスへ行き、今日は今一つ別な遺跡を見に行くといふ。やがてそのトルコ商人が来て聞いてみるとベルガマ (Bergama) へ行くという。ベルガマとはこれ古代のペルガムム (Pergamum) だ。一緒に行きませんかと誘われて、小生これ幸いと朝食もそこそ共自動車で乗る。

ここ数日間回教徒の祭日で、綿工場も視察出来ませんと二人がいつておられた。途中ギリシャ領の神話で有名なレスボス島の見える海岸で休憩。田舎の子供も晴着を着ていて可愛らしい。ひる頃ベルガマ着。先づ博物館を見てから山上の遺蹟見物。山上に砦、宮殿、大劇場、スタディアム、神殿址等がある。パーチメント (羊皮紙) はこのペルガムから由来すると案内のトルコ人も知つてゐる。ここで昼食。少し離れた丘にアスクレピオス医神の神殿、劇場も午後に見物。午後五時半イズミールへ帰る。晩はイズミールを一目で見下せる山上のロカンタシ (レストラン) で三人で夕食。こんなところで日本の人に会わうとは思わなかつた。

やがてトルコと協定が出来れば、ここから綿の積出しをするので、ここに駐在しなければならんでせうといつておられた。郊外には綿畑が多かつた。

翌八月十日、前日のタクシーの運転手と交渉して小生一人エフェソスへ行く。バスや汽車もあるが二、三時間かゝり、もう懲りているので、タクシーにした。

往復で四十リラ（約三千二百円）。古代のエフェソスはセルチューク（Selchuk）という村にある。山に囲まれた間にローマ時代の遺蹟がある。大通り、図書館、劇場、アゴラ、スタディウム、神殿、大理石通り等があり、少し離れた北の丘に聖パウロの牢獄と称する建物も見える。小生パウロと同じくダマスカスへも行き、キプロス島パフォスではパウロの繋がれた石柱あり、ギリシヤのアテネのアレオパゴスの岩山はここでパウロが説教したという。次はいよいよ小生もパウロと同じくローマへ行くことになる。南の山に有名な「エフェソスの七眠人」(Seven Sleepers of Ephesus)伝説の洞窟がある。セルチュークの村近く博物館あり、又別なローマ・ビザンチン時代の教会、砦のある丘陵がある。古代のペルガムもエフェソスもトロイも今は皆トルコの片田舎に眠っているのである。

翌八月十一日イズミール市内を見物した。ここでホーマーが生れたともいわれている。二十日から開かれる国際市の準備で公園内はごつた返している。連日の強行軍に流石の小生も些か疲れてベンチで休んで、午後はホテルでねた。

八月十二日飛行機で一氣にイスタンブールへ帰る。一時間半程である。

八月十三日、前には旧王宮 (Sergis Palace) の宝物を見たが、今度は王宮見物に行く。やはり方々の部屋にコレクションがある。中国の陶器がうんざりする

程あつて、日本の徳川時代のもかなりあつた。日本で見たこともない立派なものだつた。それからドイツ、フランス、イタリヤの陶器を見たが、その絵や色合が幼稚でとても中国のとは比較にならない。今更乍ら中国の陶器を見直して、又引返してもう一度とく見た。うれしい発見であつた。ギリシヤでも頭がなかつた。鼻や手足の欠けた石像ばかり見た目には、アテネのベナキ博物館 (Benaki Museum) の中国の陶器類がこよなく美しいものに見えたのである。又トルコ王宮には日本の象牙細工もあつてなつかしかつた。写本もあつたが、その挿絵はわが国の奈良絵のような稚拙なものである。武器陳列室に我國の鎧あり、横に鋸がうやうやしく置いてあるのは一寸おかしかつた。

小生疲れが出たのか、食物の關係か、或はチャナツカレというような田舎で散髪をして顔を剃らせた為か、口の左横にイズミールから帰る頃からくさが出来て、いくらトルコ人の前でも一寸気がひけたが、八月十六日アテネへ着くと気分もすつとして今は少しまだあとかたを残すばかりである。イスタンブールは割に涼しく夜の外出に上着がほしい程であつた。先の「キプロス島通信」はイスタンブールの客舎で八月十四日の月を見乍ら書終つたが、この「トルコ通信」は窓外にアクロポリスやその上のパルテノン、エレクテウムの見えるアテネの客舎にて記しています。「ギリシヤ通信」は是非共ギリシヤに在る間に書上げたいと思っています。小生九月五日ローマへ立ちます。(八月三十日、ギリシヤ・アテネ・オールド・ツォリス・ホテルにて)

(追記)

トルコは一体に食ひを感じて、烏打帽によれよれのズボンを穿いた労働者風の姿がイスタンブールでも多

い。しかし人は皆親切で、小生市電に乘越したら若者がわざわざガラクタ橋まで送ってくれた。アラブ系の諸国ではこんな時はきつとチップを要求するが、トルコでは外国人にたかるようなことはなく、どこでも自由に歩けた。一方食がまづく、田舎ではホテルがほんとに木賃宿程度でこれには閉口した。アラブ系の諸国では外へ出れば警戒しなければならんが、ホテルだけは皆よかつた。

それから今一つ大きな問題はトルコはアラビヤ文字を捨てて、ローマ字を採用していることである。外国人にはこれは非常に助かる。兎も角も豆字引を持つておれば看板でも何んでも引けば判るのだから有難かつた。日本もローマ字を採用しては如何という氣になります。

トルコでは中国人と間違えられることはない。皆日本をよく知つていた。(文学部教授)



昭和三十年八月三十日発行

關西大學學報 第二八二號

大坂市大淀区長柄中通二丁目一二番地
編集兼 久、井 忠 雄
發行人

大坂市北區川崎町三八
印刷所 株式 三ニワ印刷所
会社

電話堀川 七三〇二番
電話堀川 三三九三番

發行所 關西大學學報局

電話堀川 三三九三番
電話堀川 三三九三番
振替大坂 二六七七二番

學
科
目
担
任
表

商 法 (二)	英 商 法 (三)	日 本 法 制 史	獨 立 法 學	日 本 憲 法 學	行 政 法 學 (一)	法 政 學 習 (二)	刑 法 (一)	英 刑 法 (二)	英 刑 法 (三)	法 學	日 本 文 學	倫 理 學	日 本 文 學	人 類 學	心 理 學	哲 學	行 政 學	社 會 學 概 論	國 法 學
員外教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	專任講師	專任講師	教授	教授	教授	教授	教授	教授	助教授	助教授	講師	講師
西本寬一	岩本慧	石尾芳久	内田修	中義勝	堀堅士	金子又兵衛	田中熙	吉永登	横田健一	川口勇	藤本是	足立忠夫	臼井二尚	大石義雄					

(昭和三十年五月現在)

英英	英	英	英英	英英	教	社	生	行	政	民	政	刑	法	財	商	經	地	外	西	國	政	信
語語	語	語	語語	語語	學	會	物	政	治	事	事	事	律	政	法	法	方	交	洋	際	治	託
四(一)	(二)	(二)	四(一)	(二)	學	學	學	(二)	習	訟	訟	訟	思	政	演	原	自	史	法	私	學	法
專任講師	文學部	文學部	文學部	文學部	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師
大西	玉木	廣國	小野	榎本	河村	森	須田	渡邊	吉富	山本	森	毛利	武藤	羽田	西原	永島	高橋	田中	齋藤	木下	大阪谷	公雄
昭男	志太	英雄	勇	次郎	信一	東吾	省三	太郎	重夫	克己	義宣	與一	智雄	正一	寛一	清	貞三	文彦	武生	丹		

弓	柔	陸	体
道	道	上・	育・
講	講	ゴル	講
師	師	フ	義
上野傳三郎	伊藤 徳治	教員	授外
川口 清	猪飼永太郎	石渡 俊一	
バトミントン	ボクシング		

獨	獨	獨	獨	獨	獨	仏	仏	仏	仏	仏	英	英	英	英	語	英	英	英
語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語
四	四	三	二	一	一	二	三	二	二	一	一	二	二	一	一	一	二	二
講師 中川 清三	講師 鈴木 重貞	講師 潮崎 俊一	講師 脇阪 豊	講師 米田 巍	講師 梶野 艮	文部 教授 見次 直雄	講師 宇野 四郎	講師 田中敬次郎	講師 堀井令以知	講師 田邊 純夫	講師 莊保 三郎	講師 鎌田 博夫	講師 水谷 揆一	講師 三宅川 正	講師 寺田建比古	講師 秋田金次郎	文部 專任講師 星野 信夫	文部 專任講師 星野 信夫

印度哲學史概説	印度哲學史研究	仙文學史	演劇學概論 西洋美術史	支那語初級	支那語上級	獨文作品研究(二)	國語科教育法	統計學	人文地理學概説	哲學特殊講義	社會心理學	中古文學	近世文學	放送論	新聞發達史 新聞演習(一)	外國語科教育法	東洋文學 支那文學演習	社會學	專門國語	英語語	英語語	英語語	英語語	英語語	英語語	應用英語(一) 英語(一)(二)
講 師 高 島 寛 我	講 師 田 中 俊 一	講 師 辻 部 政 太 郎	講 師 辻 本 春 彦	講 師 中 村 恒 雄	講 師 土 部 弘	講 師 馬 場 吉 行	講 師 樋 口 節 夫	講 師 樋 元 和 一	講 師 廣 田 君 美	講 師 山 脇 穀	講 師 吉 永 孝 雄	講 師 藤 田 義 信	講 師 藤 田 進 一 郎	講 師 増 山 節 男	講 師 松 岡 慎 一 郎	講 師 森 東 吾	講 師 秋 本 吉 郎	講 師 大 西 昭 男	專 任 星 野 信 夫	講 師 秋 田 金 次 郎	講 師 菅 沼 省 三	講 師 ギ ブ ソ ン				

[illegible]

ケイ・シ・ン・ヨ・ン	マ・ス・コ・ミ・ユ・ニ	日 本 文 学	世 界 史 (二)	政 治 学	政 治 学	民 法 (二)	英 本 産 業 研 究 論	英 書 研 究 ・ 演 習 論	人 文 研 究	農 業 經 済 学	英 書 研 究 ・ 演 習 論	西 洋 經 済 史	統 計 經 済 学	統 計 經 済 学	演 習 史	金 融 經 済 論	經 済 学	經 済 学	工 場 經 済 学	工 場 經 済 学	經 済 学	國 際 經 済 論	獨 立 經 済 研 究 ・ 演 習 論	經 済 学	經 済 学
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
井上吉次郎	飯田 正一	石濱純太郎	池田 榮	岩崎 卯一	明石 三郎	越後 和典	市原 亮平	東井 正美	荒井 政治	高木 秀玄	矢口孝次郎	森川 太郎	三谷 友吉	松原 藤由	中川庸太郎	杉原 四郎	澤村 榮治								

商 品 学	外 國 金 融 論	經 營 比 較 論	民 法 (一)	經 済 統 計 学	東 洋 文 学	生 物 学	統 計 学	心 理 学	世 界 史 (一)	法 学	心 理 学	日 本 國 憲 法	法 学	社 会 思 想 史	經 済 地 理 学	簿 記 (一)	英 書 講 義 論	英 書 講 義 論	社 会 学	人 類 学	倫 理 学	日 本 文 学
講 師 河 村 信 一	講 師 小 野 一 郎	講 師 岡 部 利 良	講 師 太 田 武 男	講 師 上 杉 正 一 郎	講 師 板 原 哲 夫	講 師 生 澤 万 壽 夫	講 師 足 利 末 男	專 任 講 師 辻 岡 美 延	專 任 講 師 秋 山 博 愛	專 任 講 師 堀 堅 士	助 教 授 川 口 勇	助 教 授 内 田 修	助 教 授 石 尾 芳 久	短 大 教 授 加 藤 由 次 郎	短 大 教 授 宇 田 米 夫	短 大 教 授 富 山 忠 三	短 大 教 授 山 口 辰 雄	法 学 部 教 授 浪 江 源 治	文 学 部 教 授 高 橋 盛 孝	文 学 部 教 授 田 中 照	文 学 部 教 授 金 子 又 兵 衛	

演習簿記(二)	簿記(二)	哲學	經濟思想史	計畫經濟學	計畫經濟學	經營經濟學	產業心理學	倉庫論	人文地理學	財政學	論理學	公企業論	社會學	企業財務學	生物學	數學	販賣管理論	財政學總論	商法(一)	商法(一)	工業簿記	外國經濟事情	生產管理論	財政學各論	保險論
講師正井敬次	講師堀江義廣	講師細川董	講師堀經夫	講師福原行三	講師降旗武彦	講師廣田君美	講師馬場吉行	講師野村寅三郎	講師中川良之助	講師中川興之助	講師當津武彦	講師竹中龍雄	講師棚瀬襄爾	講師丹波康太郎	講師須田省三	講師杉原雅	講師山東茂一郎	講師小谷義次	講師國藏胤臣	講師久保田音二郎	講師木原正雄	講師嘉田隆美	講師柏井象雄	講師川元英二	

英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

歴史学研究(西 洋史)	講義	教授 原 弘二郎
支那文学研究	講義	教授 高橋 盛孝
支那哲学研究	講義	教授 壺井 義正
国語及国文学研 究	講義	員外 小島 吉雄
国文学特殊研究	講義	教授 小島 吉雄
大陸文学研究	講義	員外 渡邊 格司
英語学及英米文 学研究	講義	教授 石田 憲次
英語学及英米文 学研究	講義	員外 石田 憲次
英語学研究	講義	講師 山本 忠雄
英語学及英米文 学研究	講義	講師 中西信太郎
美術及美術史研 究	講義	講師 辻部政太郎
古典語研究(一) (ギリシヤ語)	講義	講師 岩倉 具實
古典語研究(二) (ラテン語)	講義	講師 岩倉 具實
日本史研究(一・二)	講義	講師 時野谷 勝
経済学研究科		
経済理論研究	講義	教授 三谷 友吉
金融経済論研究	講義	教授 森川 太郎
金融理論特殊研 究	講義	教授 森川 太郎
証券経済論研究	講義	教授 今西庄次郎
証券経済論特殊 研究	講義	教授 今西庄次郎

信託経済論研究	講義	教授 板橋 菊松
景気変動論研究	講義	教授 中川庸太郎
一般経済史研究	講義	教授 矢口孝次郎
日本経済史研究	講義	教授 鐸方 貞亮
会計学研究	講義	員外 久保田音二郎
財政学研究	講義	講師 中川與之助
経済学史研究	講義	講師 堀 経夫
国際経済論研究	講義	講師 正井 敬次
ドイツ経済史研 究	講義	講師 宮下 孝吉
企業財務論研究	講義	講師 丹波庸太郎
監査論研究	講義	講師 陶山誠太郎
短期大学		
簿記・会計・商業 演習・英語・経済 書(一)	教授	富山 忠三
簿記・会計・商業 演習・英語・経済 書(二)	教授	佐伯 三郎
英語(一・二)	教授	角田 文雄
英語(一・二)	教授	山口 辰雄
物理・生産材料 学	教授	加藤由次郎
商業・数学	教授	太田 鶏一
商業・機械	教授	橋田 慶蔵
工場・製作	教授	入江 深
工業・管理	教授	入江 深

経済地理学・商 業演習	教授	宇田 米夫
商業・経営学	助教	鯉江 城夫
商業・演習	専任	河合 信雄
商業・分習	教授	池垣定太郎
商法概論	教授	田中 照
倫理学	教授	井上吉次郎
社会学	教授	松原 藤由
産業概論	教授	鐸方 貞亮
経済史	教授	杉原 四郎
経済原論	教授	河村 宜介
交通論	教授	賀屋 俊雄
貿易実務	教授	内田 修
日本国憲法	教授	岩本 慧
商法概論	教授	石尾 芳久
法学	教授	鈴木 祥蔵
教育原理・教育 実習	教授	寛田 知義
教科教育法・教 育実習	教授	川口 勇
教育心理学	教授	石渡 俊一
体育講義	教授	堀 堅士
法学	教授	堀 堅士

教育心理学	専任	辻岡 美延
数学	講師	河村 信一
商業史	講師	今井 啓一
商業英語	講師	水谷 揆一
工学概論	講師	吉川彌三郎
商業演習・工業 経営学	講師	上田宗次郎
統計学	講師	平山 政市
金融論	講師	中村 精
租税法	講師	長柄 金吾
英語(一・二・三・四)	講師	川並 秀雄
英語(一・二)	講師	大坪 一
英語(一・二)	講師	久保田 肇
英語(一・二・三・四)	講師	笠井 信男
英語(一・二)	講師	植田 忠男
英語(一・二)	講師	ギブソン
体育実技・拳法	講師	澤山 勝
体育実技・陸上 体操	講師	小林 繁
体育実技・柔道	講師	秋岡 高
英語(一・二)	講師	生地 幸雄
英語(一・二)	講師	樋元 和一
哲学概説	講師	本内 佳市
工業簿記・原価 計算・商業演習	講師	稲葉 襄
工業経営学・商 業演習	講師	逢阪 勝見
租税法	講師	和田 正史
世界史	講師	エー ライク
実用英語	講師	エー ライク

關西大學創立七十周年記念 拡充資金募集趣意書

わが關西大學は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律学校として開校したのでありますが、爾來六十有余年校友先輩の苦心と不断的努力に依つて目覚ましい發展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私学の雄として、自他共に許す一大学園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、国家社会の進運に大きな寄与をなしたことは、われわれの深く喜びとするところであります。学園發展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く独立国家として出発しましたが、国家の前途は甚だ多難であります。わが国は今後、文化国家として世界文化に貢献すべきであります、またそれによつて友邦の信に應えなければなりません、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本学は、大学の崇高な使命を自覺すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、学の実化という理想に向つて、益々邁進したいと思ひます。本学が新学制に基き、各大学にさきがけて、大学院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において将来の飛躍的な發展を意圖したからに外なりません。

本学は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計画を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大学院、大学ホール、経済学部 法学部教室の増築等はその一環として既に竣工しましたが、なお計画中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山^{文学部}学舎の改築、二部学生を收容するための天六学舎の増築、学生に対する施設の一部分として、千里山尚志館（学生食堂学友会部室）の増改築等であります。これらは逐次工事に着手し或は着工準備中であり、また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代設備を持つ研究室の新築を構想中であり、これらが竣工の暁には学園は全く面目を一新すると思ひます。

こうした外觀の整備と相俟つて、特に重要なものは、大学の真価を決する教授陣容の充実にあります。二十八会計年度においては教授十名、助

教授八名、専任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の經濟状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充実に共に、研究用圖書の完備も大切であります、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するものと考えられますが就中、学舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の經濟的混乱により本大学法人の經理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず關係者各位その他の御援助により御融出を仰がねばならぬ実情にあります。

大学の生命は不朽であります、学園の生々發展を希うためには、各位の学園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、学園の繁榮を念願する各位の御賛同を請ひ、この七十周年記念事業の完成を期したいと思います。各位の御賛同により本事業完成の暁には、学園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な發展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願ひ上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長 岩 崎 朋 吉
關西大學理事長 白 川 一

創立七十周年記念事業学舎増改築概要

一、工事費總額約三億三千五百万円

二、工事概要

- (一) 千里山^{法学部}学舎改築（鉄筋コンクリート造）
三階建 一千六百六十八坪 工費約二億六千四百万円
- (二) 天六学舎増築（鉄筋コンクリート造）
五階建 三百七十八坪 工費約三千万円
- (三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建 三百二十一坪 工費約六百万円
- (四) 關西大學第一高等学校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建 七百八十五坪 工費約三千五百万円